日本ラカン協会第 20 回大会シンポジウム　ラカンとフランス精神医学
日時：12 月 6 日（日）　14:30～18:00
場所：オンライン開催（参加方法は後日告知いたします。）
提題者：西依康氏（自治医科大学）、河野一紀理事、濱田秀伯氏（六番町メンタルクリニック）
司会：松本卓也理事

本シンポジウムでは、今年度の日本ラカン協会の年次テーマである「ラカンはいかにしてラカンになったか Les formations de Jacques Lacan」に基づき、ラカンとフランス精神医学の関係について議論を行う。

本シンポジウムにもお招きした濱田秀伯氏による浩瀚な書物『精神症候学（Sémiologie psychiatrique）』をみれば分かるように、古典的なフランス精神医学は、精神症状を事細かに記述し、分類するという「記述」の学であったひとまずは言うことができるだろう。では、そのなかでラカンが果たした役割とはいったい何だろうか？　精神分析家となる以前に精神科医としてそのキャリアを開始したラカンの周囲には、彼に影響を与えたクレランボーやアンリ・クロードのような先行世代、あるいはアンリ・エーのような論敵／盟友が存在した。本シンポジウムでは、本協会ではこれまでそれほど光があてられてこなかったそれらの精神科医たちとラカンの、そして精神医学とラカンとの関係に迫りたい。

自治医科大学の西依康氏からは、ラカンの最初期の論考においてすでにみられる「構造」という概念の使用を手がかりに、記述に寄りがちであったフランス精神医学のなかに現象学的精神病理学と精神分析を導入しようとした若きラカンの関心について、そして、今年度より日本ラカン協会の理事に就任した河野一紀氏からは、機械論的器質論が支配的であったなかで「心因」という概念を導入する役割を果たした精神分析理論をめぐるラカンとエーの議論についてうかがう。そして、濱田秀伯氏からは、ラカンの周囲の重要人物であったクロード、エー、クレランボーらについて提題をお願いしている。

精神科医ラカンと構造概念の導入

西依康（自治医科大学）

1939 年に亡命先のニューヨークでレヴィ＝ストロースがヤコブソン R.と邂逅するよりも以前、そしてソシュールの仕事がイェルムスレウによって『構造言語学』として名指されるよりも前に、我々の若き精神科医は『パラノイア精神病の諸構造』と題した論考を週刊パリ病院連合誌に書いた。この時代－いわば“構造主義以前”－のラカンにおける構造概念の源泉には、ミンコフスキー E. による現象学的精神病理学と、精神分析の複合 complexes 概念の読解の二つがあることが指摘されている。本発表ではこの概念を一つの鍵として、とり

わけ 1930 年代のフランス精神医学の潮流にも目を向けながら、博士論文を一旦の区切りとする“精神科医”ラカンの関心について考えてみたい。

機械論的器質論への二つの応答　ラカンのパラノイア論とエーの器質-力動論

河野一紀（梅花女子大学）

ジャック・ラカンとアンリ・エー、1946 年ボンヌヴァルでの精神疾患の心因論をテーマにしたコロックにおいて対峙した 2 人は、その出発点にあって共通した問題意識を持っていた。両者が薫陶を受けた当時のフランス精神医学界では、科学的精神医学を標榜する機械論的器質論が優勢である一方、これに対抗するかたちで精神分析に影響を受けた心因論が勢いを増しつつあった。こうした状況のなか、機械論的器質論に代わる理論を臨床的事実に基づき打ち立てるという目的のもと両者は精神医学の道へと踏み出した。パラノイアの心因発生を主張した 1932 年の学位論文に始まり、精神医学に固有の対象を扱うための具体的な心理学の構想を進めるなかで、ラカンはフロイト理論を独自の仕方で取り込みながら、その思考の基軸を精神医学から精神分析へと転換していく。一方、同じ 1932 年に発表された自動症論において、エーは心因論と器質論の対立を乗り越える「第三の構想」を表し、やがてジャクソニズムを批判的に発展させた器質-力動論によって精神医学の固有性を擁護することになる。本発表では、ラカンが精神分析家となる前史をエーとの対比を交えながら描き出すと同時に、「心的因果性」をめぐる議論の現代的意義についても論じたい。

二大戦間のフランス精神医学

濱田秀伯（六番町メンタルクリニック）

20 世紀の 2 つの世界大戦にはさまれた 20 年間のフランスは独自の精神医学を育んだ。サンタンヌ病院クリニックを主宰した Claude H は、身体治療を積極的に導入する一方で精神分析を取り入れる折衷主義をとった。Claude H のもとで学位論文をまとめた Ey H は、ジャクソン学説を発展させた器質力動説を提唱した。Gatian de Clérambault G は警察施設で精神鑑定をもとに症候学を洗練させ、機械論的な精神自動症と熱情精神病を確立した。精神分析に転じる前の Lacan J は、Gatian de Clérambault G を師と仰ぎ、フランスの伝統に立脚した自罰パラノイアの学位論文をまとめた。それぞれ異なる道を歩んだ 4 人は、反発と尊敬で互いに結ばれている。